

青い聖痕の神話——浮世草子『和漢乗合船』の位置

篠原進

「又会うぜ、きつと会う。瀧の下で」(『春の雪』)。「豊饒の海」四部作の物語世界は、松枝清顕が友人の本多繁邦に遺した、この一言からはじまる。主人公の身体に刻印された聖痕と、予言的なことばとが綾なす壮大な輪廻転生の物語。今、「豊饒の海」の分厚い研究史に踏み込むつもりはないし、ましてや三島由紀夫自身が典拠と明かす『浜松中納言物語』にまで遡行する意図など毛頭ない。ただ、一点だけ問題にしたいことがある。それは清顕の左の脇の下に刻まれた三つの黒子のことだ。それが何を表象するのかについてはともかく、輪廻転生を担保するこうした小道具がなぜ必要だったのだろうか。こんな話がある。

九州地方の遊廓に、小紫という遊女がいた。容姿に恵まれ、優しい性格の彼女は歌の素養もあり、多くの旅人に慕われた。上方の商人さぬきや藤八もその一人で、年二回の長崎行には彼女の許に寄るのを常としていた。二人はいっしか相愛の仲とな

り、四、五年が経った。そんな折、小紫は病に倒れ、瀕死の状況となる。慌てて駆けつけた藤八に、彼女は奇妙な遺言を伝える。今生で夫婦となる願いは叶わなかったが、自分の死後に「何にてもふしぎなることはあらば、よろしく頼み奉る」と。その年の十一月、藤八は小紫と不思議な再会をする。隣家の米屋に生まれた女子が小紫に瓜二つで、脇の下には「小紫」という痣のようなものが刻まれていたのだ。二人は結ばれるが、再び彼女に先立たれた藤八は出家したという。

高古堂主人、すなわち京都の書肆小幡宗左衛門が編んだ『新説百物語』(明和四年(一七六七) 巻二「脇の下に小紫といふ文字ありし事」)に載る話だ。「小紫」という聖痕など、表現があまりに直截的で秀作とは言いが、稚拙な分だけ印象が強いのか、教室では不思議なほどに好評だったという記憶がある。なるほど、未熟と紙一重の単純さがデジタル世代の思考回路に合致し

たという見方も間違いいとはい切れない。ただ、それだけなのか。本話の根底には、叙述の巧拙を超えて人の心を衝き動かす普遍的な何かがあるのではないか。最適なことばが見つからないので、当面それを「物語のツボ」とでも呼んでおき、該話に戻ろう。

—

「何にてもふしぎなること」という予言と、それを踏まえた小紫の転生。本話の生命がこの一点に存することは疑いない。物語の本質が現実の超克や、非日常性にあるとするなら、予言の実現や死者の転生ほど相応しいものはないだろう。リニアで不可逆的な時間が流れる現実世界にあつては死者が蘇ることはないし、わたしたちは複数の空間に同時に存在することも不可能である。そういった意味で、現実の壁とは時空の制約でもあるのだ。物語はそうした制約と一見切れているように思えるが、現実と離れすぎれば荒唐無稽となるし、遵守するのみでは存在意義がない。となれば、時間を先取りする予言や伏線、死者を合理的に蘇らせる転生といった物語の方法は、そうした時空の制約を逆手にとる絶妙な方策ということになる。

物語のそうした機能を十全に活用した該話であるが、一読して明らかなのは要所の多くを「愛卿伝」（『剪燈新話』）に拠っているということであろう。すなわち、義母に尽し夫（趙家の息子）の留守宅を守りながらも、占領軍の劉万戸に迫られて自害した

中国浙江省の名妓・羅愛愛こと愛卿の話だ。長い不在から戻った夫は銀杏の下の遺体と対面し、その予言通り男子に転生した彼女と再会することとなる。

『剪燈新話句解』（慶安元年（一六四八）の介在もあり、「愛卿伝」は近世文学の中で何度も形を改めながら利用される。その系譜を改めてたどることはしないが、該話がその極北に位置し、反復使用され零落した「愛卿伝」の残骸であることは間違いないだろう。「愛卿伝」に拠った作としては「遊女宮木野」（『浅井了意』伽婢子）巻六の三・寛文六年（一六六六）。但し目録には「藤井清六遊女宮城野を娶事」とある」と「浅茅が宿」（上田秋成『雨月物語』巻二の一・安永五年（一七七六）刊）が良く知られているが、決定的に違う点がある。それは、この二書に転生を担保する聖痕の記述がないことだ。

念のために確認すれば、前者は武田信玄と今川氏真とが戦った永祿十一年（一五六八）に時間軸を移し、駿河府中を舞台としている。すなわち、同地の藤井清六に身請けされた遊女宮木野は、京都の叔父を訪ねた夫の留守宅を守り、義母に尽くし、その死を看取るが、武田軍の狼藉を避けて縊死。府中に戻った清六は、柿の木の下で遺骸と対面し、その言のごとく、鎌倉の家に男子として転生した彼女と再会するという内容である。

また後者は、鎌倉の足利成氏と上杉房顕らが戦った享徳四年（一四五五）ころに歴史的時間を設定し、「物にかかはらぬ性より農作をうたてき物に厭ひけるま、」に田を売り、京へ行商に出

た夫の勝四郎を下総真間の郷で七年の間、ひたすら待ち続けた宮木の話に変えている。戦争や病に罹かれて帰郷の遅れた勝四郎は廃屋に一人残った宮木と再会するが、翌朝には消え、古老から彼女の消息と土地に伝わる真間の手児女の伝説を聞くという結末。

転生の実現と、それを担保する聖痕。小紫の逸話(『新説百物語』)を支える二つのツボ。「愛卿伝」と「遊女宮木野」は後者を欠き、「浅茅が宿」は二つとも欠いている。そうした小道具を捨て、秋成は何を描いたのか。それについては後述するとして、当面の問題は、二つツボが『新説百物語』の独創なのか、それとも「愛卿伝」の系譜上に二つを具備する第三の作品が存在するのかということだ。

二

そんなことを考えていた折、松村美奈氏の口頭発表に接した³。題して「和漢乗合船」の成立に関する一考察―運敵著「寂照堂谷響集」・「谷響統集」の介在について―。落月堂操庵「和漢乗合船」(正徳三(一七三三)年正月刊)は六卷六冊、各巻二話、合計一二話の構成。「(外国船の船中での「倭人韓人^{まじは}の交り」頼むところは訳官^{しやくくわん}の詞のみ。是を拙なき筆に記して) 倭漢乗合船と名づくる」(序)とあるごとく、各話は前半の四分の三はどが翻案、残りが「朝鮮の学士李東郭⁵」の語る翻訳という異色作。もちろん、本書に関しては幾つかの先行研究⁶があり、拙稿

でも触れたことがある⁷。問題は翻訳部分に明示された「典拠」で、その信憑性については従来から疑問が呈せられてきた⁸。松村氏もその一人で、今回一二話中九話が実は「寂照堂谷響集」(元禄二年(一六八九)・京都中野宗左衛門・前川茂右衛門)「谷響統集」(同五年・京都前川茂右衛門・前川権兵衛)に拠ることを明らかにしたのだ。該書は智積院七代目の住職・運敵が退隠後に住んだ寂照堂での対談に基づくもので(『日本仏教典籍大事典』、「仏教・随筆」(『国書総目録』)に分類されているが、出典を明記した六七八項目の内容は怪異奇聞など広範囲に及び、特定のジャンルには収まりきれないものがある。

『寂照堂谷響集』『谷響統集』に取材しながら、それを明かさなかったのはなぜか。その答えは松村氏の論文を待つとして、一つだけ強調しておきたい点がある。それは、そこに明示された典拠のすべてが嘘というわけでもないということだ。『寂照堂谷響集』『谷響統集』との関係が確認できなかった三話中の一つ、「二世の夫婦」(巻三のこ)もその一例であるが、結論を先取りして言えば、「剪燈新話に見へたり」と「愛卿伝」に拠ったことを明かした本話こそが、二つの「小道具」を備えた作品だったのである。

所からとて山風もあらく、軒もる月の影氷るとよみし四国の土佐といふ所は、人の心も気早に、深山の猿さへ余所に、まさつて賢き国の太守、長曾我部土佐守元親と聞えしは、

宮内少輔元国の嫡子にて、長岡郡江村の岡豊の城をたもち、小身にてありしか共、計略の智恵の輪にかけて敵を釣くことの妙を得、するどなる針にまはつて当る者なかりしかば、終には四国をもことごとく手に入れて、威光を南海にか、やかし、立鳥を八嶋の渚に膝行すばかり。

「土佐国にて百首歌よみ侍りける中に、冬月／我が庵はとさの山風さゆる夜に軒もる月のかげこほるなり」(『新葉和歌集』)という古歌を踏まえた起筆から、「此国の猿すなをにして。藝を仕つけよき也」(『人国記』下・土佐)とされた土佐のお国柄や氣質へと筆を及ぼす文辞。時は、往時当国で全盛を誇った長曾(宗)我部土佐守元親の時代に遡行し、その歴史的時間の中で物語が記されていく。

「岡豊の城に再任し」た「宮内少輔元国」(『四国軍記』巻二)の長子で、「元親は生得背高く、色白く、柔和にして、器量骨柄、天晴類なしと見えながら、要用の外は物いふ事なく、人に対面しても会釈もな」(『土佐物語』巻四)いと記された寡黙な戦国武将の元親。彼は「智計」や「奇功」(『四国軍記』巻三)で一度は四国全土を平定しながらも秀吉に敗れ、領地を土佐一国に減じられて慶長四年五月一九日に六一歳で没したという。ちなみに、長子弥三郎信親も七年前に島津家久との戸次川の戦いで既に亡く(享年二二)。「土佐物語」巻一五、次男の右衛門太郎盛親が家督を継ぐこととなる。

そんな盛親に寵愛された、傍小姓あがりで風雅を好む佐賀勝九郎(三二・三歳)。彼こそが本話の主人公なのである。花の季節に横波(今、浦ノ内湾。以下括弧内は現在の地名)に出かけ、出見の里泉村。須崎市で花山法皇の廟に詣でて、「石碑の文字に感涙すく」なからず、幾度か見上げ見おろす「勝九郎。六五代花山天皇(九六八—一〇〇八)は一七歳で即位するが、寵愛した女御の死に直面し、悲嘆にくれる間隙を藤原兼家に衝かれ、退位を余儀なくされた悲運の人。その墓は京都市にあるが(紙屋上陵。北区衣笠)、土佐客死説(『四国遍礼霊場記』青龍寺)も残り、高知県須崎市の出見神社は花山天皇を祭神としている(高知県の地名)平凡社。「物語の中に拳銃が出てきたら、それは発射されなくてはならない」というチエーホフのひそみに倣い、この場面の意味を考えれば、大きな力に翻弄された花山天皇の悲運は伏線化しながら勝九郎の運命を決定付けるのであるが、あまり先を急がずに筋をたどろう。

三

友人の出見小左衛門方に一宿し、「諸家の評判・武士の剛臆など語りあふ」二人。その心性はあくまでも、戦国期のそれなのだ。互いに一目惚れして、出見の娘(二六歳)と結婚。美女の二人は夫婦仲も良く出世も確実視されていたが、歴史の大きなうねりに巻き込まれ、さながら時代浄瑠璃のごとく二人の運命は暗転することとなる。すなわち、慶長五年(一六〇〇)

九月一五日の関ヶ原。石田三成に与した盛親の軍は敗れ、九死に一生を得た勝九郎は旅人姿で落ち延びる。やつとの思いでたどり着いた、越前木の目峠（木ノ芽峠）荒乳山（愛発山）に近い、海路山（堀山）の麓。その隠者素竹斎は母方の従兄弟で、堀尾帶刀吉晴の旧臣。ちなみに、堀尾吉晴（二五四—一六一）は信長、秀吉に仕え、浜松城主として一二万石を拝領するが、慶長四年、子・忠氏を浜松に残し、秀吉の遺志で加増された越前府中（五万石）に単身移動。関ヶ原の戦いの折、三成方に与することを拒んだ功で出雲、隠岐二二三万五千余石を賜り、松江に移った後、府中で隠居したという。堀尾のこうした事跡を本話に重ねるなら、素竹斎の退隠は堀尾が府中に移った慶長四年以後で、慶長五年九月以前と推定できる。ともかく、彼は勝九郎を匿うことを承知する。

そんなこととも知らず、佐賀（佐賀町。今黒潮町）に残った勝九郎の妻は、蹉跎の観音（土佐清水市足摺。金剛福寺・三面千手観音）に夫の無事な帰還を祈るが、不安に駆られ月山（大月町。月山神社）の田尽（竜串）の磯部の美景を楽しむ気分にもなれない。仁井田の五社（仁井田五所神社）にも祈るが効なく、敗戦の報が届く。夫の死を確信した彼女は、「自も又如何なる敵の手にとらはれ、うき事にあふのみか、夫の名までくだ」すことを嫌い、佐賀の浦（黒潮町佐賀）に身を沈める。

翌年の霜月半ばの夕暮れ時、大雪の中、黒き帽子に菅笠姿の女性が妻の安否を案じ暮らす勝九郎の閑居を訪れる。妻と知っ

た勝九郎は枕を交わすが、二日目の夜に彼女は言う、自分は自殺したが貞節を守ったので越前国府中柳町（武生市、柳町）の大福人・木曾屋祐清の妻の腹に宿り、明日転生すると。また言う、その証は「左の腕の下つら、肘より三寸余り上に青き痣」だと。彼女は自分の身体に刻された聖痕を見せて、姿を消す。

以下は、木曾屋を訪ねた勝九郎が、生まれたばかりの女子の身体に刻まれた聖痕を確認し、「貞女の節に死に係る奇特を顯はすこと、前代にまだ聞ず」と感心した祐清の養子となり、一四年後に結婚し、二世の夫婦となる結末。

『新説百物語』がこれに拠ったか、否かはともかく、「愛卿伝」の系譜上に位置する本話が、（女兒への）転生と聖痕という二つの小道具を備えた作品であることは間違いない。

四

「二世の夫婦」の内容を詳述したのには、理由がある。それは「浮世草子」（長谷川強「浮世草子考証年表」）に分類される本書が、全盛期を迎えつつあった八文字屋本のそれとはかなり異質であり、歴史的事実や土地の名など「出所有事を物語といふなり」（『囉物語』序）という物語観に沿って作られていることを示したかったためだ。誤解を恐れずに言えば、歴史小説的な側面を有する読本の世界が、ここに先取りされているのだ。その点については後述するとして、当面は各作品のリァリティを担保する役割りを担った「歴史」について考えておこう。

『和漢乗合船』巻名		時代(本文中に記述有)	場所	武將名	松村美奈氏の指摘
巻一の二「雪密夫仲人」	二「小造夢」	文祿三年(一五九四)	名護屋・京都	豊臣秀吉	谷響統集巻十「劉喜焚妻」。
巻二の二「即身即命」	二「八木岡氏金鶏」	永祿四年(一五六二) 永祿五年(一五六二) 天正十五年(一五八七)	信州嵐宿 近江葛岡 肥後阿蘇の宮	真田昌幸 佐々木義賢 豊臣秀吉	谷響集巻七「白鼠知吉凶。統集巻八「淳干禁槐安国夢」。 統集巻六「人死屍成驢」。 谷響集巻三「金鶏石鶏」同巻四「韓志和機巧」。統集巻九「飛驒工」(「飛驒工川成互呈儀」「百済河成」。 驛工」)。本文中には「剪燈新話」「愛卿伝」に拠るとある。
巻三の二「二世の夫婦」	二「蝦死鮎代」	慶長五年(一六〇〇) 天正十九年(一五九二)	土佐・越前 肥前川上	石田三成 大友宗麟	*本文中には「剪燈新話」「愛卿伝」に拠るとある。 *「広異記」。他に「幽冥録」「報応記」「冥祥記」の名。
巻四の二「文武二道鬱気」	二「五輪法師冠」	*永祿三年(桶狭間)	清見湯 越前	今川氏真 朝倉義景	統集巻八「賀陽良藤」を換骨奪胎か。 谷響集巻五「山臊」。統集巻十「馬公亮書鬼手」「郭代公題魅類」。
巻五の二「二子二心」	二「白小袖奇怪」	天正九年(一五八一) 慶長三年(一五九八)	丹後・京都 大坂	一色義定 豊臣秀頼	統集巻三「百子同産」「四乳俱四」「一乳三男」「學生相肖」。 *「剪燈新話」。
巻六の二「我小簪」	二「隠形術」	近き比	筑紫田那耆 信貴山	五百川左門 松永久秀	統集巻十「前妻責後妻」「婦人見鏡中」。 統集巻六「楚市儉」「秀州刺客」「肉飛仙」「壁飛」「盜侠」。

「愛卿伝」では至正一六年(一三五六)、張士誠の乱を防ぐべく元に雇われた楊完の手下・劉万戸の横暴が愛卿の悲劇の契機となるが、『新説百物語』を除く他の三作にもそうした「歴史」が取り込まれている。前述のごとく、「遊女宮木野」は信玄が氏真を追放した永祿二年(一五六八)の駿河府中。「浅茅が宿」は享徳三年(一四五四)二月、足利成氏が上杉憲忠を謀殺したことを契機に、真間の郷一帯が戦場となった時期(鎌倉大草紙)。

そして「二世の夫婦」は、長曾我部家の没落が決定的になった、慶長五年(一六〇〇)ころの土佐と越前。これらの仮構された時空は、どこまで必然性を有していたのだろうか。

『伽婢子』六八話の時間は明徳年中(一三九〇～九四)から天正中(一五七三～九二)と約二〇〇年の幅があり、具体的には応仁の乱以前(一三九〇～一四六六)六、応仁元年より享祿四年(一四六七～一五三二)一四、天文年刊(一五三二～五四)一〇、弘

治・永祿年間（二五五～六九）一三、元龜・天正年間（二五七～九二）九、時代不詳一七となる¹¹。

『雨月物語』の場合、仁安三年（一一六八）、文明一七年（二四八五）、享徳四年（二四五五）～寛正二年（二四六二）、延長（九二三～九三二）、文祿四年（二五九五・豊臣秀次自刃）以後、嘉吉元年（二四四二）以後三代、不明（いつの時代なりけん）、明応二年（二四九三・快庵没）以前、文祿四年（二五九五・蒲生氏郷没）以前ということで、時間の幅は約六七〇年と広い。これに対し『和漢乗合船』の時間は永祿三年（二五六〇）から慶長五年（二六〇〇）の四〇年間。これを見る限りでは、徳川家が天下を統一する直前の時代をより集中的に描こうとしていることが分かる。

了意が「戦国期」に時間を設定し、主に『甲陽軍鑑』を用いて「歴史を語ろうと」した理由について江本裕は言う、「乱世人の心豺狼のごとき中で、人は汚れなき世界に憧れる」ので、「戦乱と異界の交錯」交歓が「悲運を浄化」するのだと。また言う、それは「翻訳臭を消」し、「話に現実感覚を持たせる」効果もあると¹²。ただ、それでも「遊女宮木野」の時空が、なぜ永祿一年の駿河府中なのかという問題は残る。その点対照的なのが、「浅茅が宿」である。

「此年享徳の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放て、館兵火に跡なく滅ければ、御所は総州の御味方へ落させ給ふより、関の東忽に乱れて、心々の世の中となりしほどに」。こう定められた「浅茅が宿」の時間は、手児奈伝説から必然的に選

び取られたのだろうか。というのは、真間が位置する市川国府台付近が戦乱に巻き込まれる契機は、この時期の争闘にあったからである。すなわち、永享の乱（一四三八）の翌年に鎌倉公方足利持氏は自刃。遺子を擁した結城氏朝も結城合戦で滅びるが、古河公方成氏に付く千葉実胤らの関東豪族と関東管領上杉憲忠らが対立する中、享徳三年（二四五四）に憲忠が殺され、武蔵・相模・上野を統べる上杉と常陸・両総・安房を領す成氏側諸豪族との争いは次第に先鋭化して行く。上杉方の市川城主・千葉胤直が成氏方の原胤房に亡ぼされたこともあり、幕府は胤直の弟で市川を治めた実胤を援けるため東常縁を下すが、市川は占領され、両者の争いは文明一〇年（一四七八）の和平まで続くことになるのである¹³。

そんな血にまみれた「歴史」が透けて見える、「世の中騒がしきにつれて、人の心も恐ろしくなり」、「心ぐの世の中とな」った真間の郷。「農作をうたてき物に厭ひけるま、」に田を売り、京に向った夫の勝四郎。彼が不安を口にする妻の宮木に誓った、「葛のうら葉のかへるは此秋なるべし」という約束が守られることはなかった。なるほど、彼も当初は宮木との約束を果たすべく、帰路を急いだ。それを妨げたのは「落草」や罹病だったのだから不可抗力とも言えるし、「（戦争が激化）妻も世に生きてあらじ」と思い込んだのも仕方がなかったのかも知れない。だが、それでも七年は長すぎる。何処にいても、誰とでも巧くやっていける、恵まれた家に育った者にありがちな

勝四郎の「物にかかはらぬ性」^{さか}。江戸のマルタン・ゲール¹⁴になり損ねた彼の救いような鈍感さは、この場合無神経と同義でもあるのだ。

底知れぬ不安と葛藤を抱えながら、約束を信じて待ち続けた宮木。彼女の営為を徒勞にした、無意識の暴力。ここに形象されているのは、いつも「歴史」の被害者であり続ける女性という存在だ。複数の求愛に応えるには死しかないと考え、不器用な選択をした手児女（金砂）。真間の人々に語り継がれてきた伝説の古層を掘り起こし、それとの交響が悲話を増幅するという意味で、秋成は絶妙の時空を選び取っているのである。

「葛のうら葉のかへる（裏見→恨み）」という「幻語」（高田衛¹⁵）が伏線的役割を担うとされる、「浅茅が宿」の言語構造。「二世の夫婦」にそこまでの成熟はないが、共通点も少なくない。今から三〇年以上も前、本話の存在に注目した佐藤深雪は女性を遊女・妓女としなかったこと、彼女に係累がないこと、発墓の要素を欠くこと、夫の旅の途中で出現する保護者の存在、妻の死の認知、勝九郎の妻の入水死と手古奈の入水伝説など多くの点で、それが「浅茅が宿」の世界を先取りすると述べた。主人公の名前の類似（勝九郎→勝四郎）や、伝説の古層（花山天皇）との交響など傍証は他にもあり傾聴すべき仮説であったが、論文集に収録しなかったことも相俟って定説とはならず、現在では「雨月物語」典拠一覽¹⁶にも採られていない。だが、その忘れられた指摘を再検討すべき時期が来ているのではないだろうか。

話を「二世の夫婦」に戻そう。

一度は四国全土を掌握しながらも秀吉に敗れ、土佐一国の領主に甘んじた長曾我部元親の栄光と挫折。後継者となった次男・盛親の衰滅を決定付けた、「関ヶ原」。佐賀勝九郎の運命はそうした長曾我部家の歴史を肉体化しながら語られていくのである。「歴史」の被害者から、関与者へという構図。こう考えると、勝九郎が一兵士として「関ヶ原」に参戦しているのは示唆的でもある。すなわち本話は「歴史」そのものが主人公でもあり、落武者となった勝九郎が侍をやめた素竹斎の庇護を受けた後、越前府中で富裕な町家の養子婿となるという結末は、武の土佐から（後に北前船で賑わうことになる）越前の町人へという「歴史」のダイナミズムを体現してもいたのである。

五

了意に「歴史を語ろうと」する意図があったかどうかはともかく、一般市民を主人公とする前述の二作の場合、「歴史」は遠景であり、「戦乱」は脇役でしかなかった。それが武士を主人公とする本話では、中心的な位置を占めることになるのだ。軍記さながらの戦乱描写。そこに多くの分量を割いた、操扨とはいかなる人物だったのだろうか。

「或は討れ或は生捕れて、軍勢^{いくさ}十方に落^{おち}うせぬ。野上^{のがみ}・関ヶ原^{せきがはら}は、討れし者の屍^{かばね}新たに山をつき、国中は皆黒血川^{みなくろぐち}となつて、草葉^{くさば}は紅葉^{もみぢ}を染出^{そめだ}せり。」

「諸家の評判・武士の剛臆など語りあ」つていた勝九郎自身が参加した「関ヶ原」の惨状。戦争という「祭り」の後の、兵どもの夢のあとは、「黒血」にまみれて、いつも空しく哀しいのだ。

「魁の兵一人も残らず、人馬共に打倒され、血になつてぞ漂ひける。味方多く討死して、今は早、主従廿余騎に打なされ、除胃^{のけふと}になつて、人馬共に皆朱に染めなしたるが」
〔四国軍記〕巻二。

「味方打負崩れ懸るを見て、急ぎ引返す所に、流れ矢来りて、爰を専途と戦ひけれど、終に打負け、散々にぞ落行きける」〔土佐物語〕巻一八。

ほぼ同時期に書かれ、編まれた土佐の軍記との類似。なるほど、戦乱場面の描写は誰が書いても五十歩百歩なのかも知れない。ただ、それでも文体の類似は気になるし、操扨が三年後に手掛ける『楠一生記』も、そうした彼の資質から必然的に導き出されたものと考えて良いだろう。

『楠一生記』は大本一二巻一二冊。刊記は「正徳六^丙年弥生吉辰・洛陽書林 今井七郎兵衛／西村理右衛門／金屋平右衛門」で、内容は次の序文に明らかだ。

「勇力はまことに天下をたもち。四海を治るの用にたらず。智あらず仁あらずんば。いか（二オ）でか其徳を。万世の後に。のこす事を得ん。されば楠正成は。後醍醐帝に仕へ。智仁勇の三徳をかねて。忠勇節烈古今に独歩す。

謀^{はかりごと}をなすに。中らずといふ事なく。戦にのぞむに克^たずといふ事なし。故に再王室を興^{おこ}し。四海を一統す。功なるに及んで。倭臣朝に権を震^{おこ}ひ。計中れりといへども用ひられず。是に至て卒に（二ウ）身を以て国に許し。死して美名を後世に伝ふ。盛なる哉。今に至つて。樵夫牧童も。其功を感称して止^{やま}す。其神策を美談するの餘り。暇の日。窓前に筆をとつて。楠公の忠勇奇策假名を以て是を記す。編成て十二巻。名つけて楠一生記といふ。曾て学者のためにあらず。幼稚にたよりするの。一助な（二オ）らんと爾云フ／正徳六^丙年稔季春桃節日／落月堂／操扨。

多くの戦いに勝利し、後醍醐天皇の倒幕に貢献しながらも、建武の新政（二三三）後は倭臣に遮られてその能力を生かし切れず、足利尊氏の謀反の前に敗れた楠木正成。操扨は「暇の日。窓前に筆をと」り、多数の人に称賛された彼の「忠勇奇策」を「学者のため」ではなく、「幼稚に」も親しみやすい假名に和らげて記したというのである。

「智仁勇の三徳をそなへ。古今不識の明将と。その名を後代にのこせしは。楠河内判官正成なり。その世景をたづぬれば」〔巻一〕「楠家の世景付多門兵衛正成美名天下に顕はる、事」と正成の出自を記すことにはじまり、「せいきの風にひるかへりて、なびくけしきは、秋の野のおばなか、すゑよりもしげく、けんげきの日にえいじてか、やきける有様は、あかつきの霜のかれたるくさにしげるがごとく也」（巻五「ちはやの城いくさの事」と戦乱場面

を叙述する本書は、一見新たな軍書作者の誕生を思わせる外見を有している。だが、内実は『太平記』から正成関係の記述を抽出し、それを貼り合わせて作った安易なもので、歴史上の「朝敵」を羅列した次の例に代表されるごとく、独自の歴史観とはほど遠い内容となっているのである。

「平将門の他」大石山丸。大山王子。大友の真鳥。守屋の大臣。蘇我入鹿。豊浦の大臣。山田の石川左大臣。長屋の。右大臣豊成（『太平記』は「山田石川左大臣長屋右大臣豊成」と記す。伊与の親王。氷上の川継。橘の逸勢。文屋の宮田江美の押かつ。井上の皇后。早良の太子。大友の皇子藤原の仲成。相馬の将門（「将門」なし）天慶のすみとも康和のよしちか。宇治の悪左府。六条のはうぐはんためよし。悪右衛門のかみ信頼。あべの貞任宗任。清原のたけひら。家ひら（「家ひら」なし）。平しやうこく清もり。木曾のくはんじやよしなか。あさ原八郎為頼時政九代このうゑん高時法師にいたるまで。朝てきと成て」（巻十一の九「日本朝てきの事」。括弧内は『太平記』¹⁹巻十六「日本朝敵ノ事」との差異）。

この他『太平記』に拠ったことが明らかで、文章もほぼ同文の章を、以下に示しておく。

もちろん、その多くを『太平記』に拠っているととしても、「一代記」としての体裁は整っている。だが、そこに操縦独自の正成観や歴史観が提示されることはなく、「浮世草子」（『国書総目録』²⁰）としてはもとより、軍書²¹としても中途半端な仕上がりとな

「補一生記」	「太平記」
巻三の一「主上御夢の事付楠が事」	巻三「主上御夢事付楠事」
巻三の二「赤坂城軍の事」	巻二「赤坂城軍事」
巻四の一「楠天王寺出張の事付隅田高橋并宇都の宮事」	巻六「楠出張天王寺事付隅田高橋并宇都の宮事」
巻四の二「正成天王寺の未来記披見の事」	巻六「正成天王寺未来記披見事」
巻五の一「ちはやの城いくさの事」	巻六「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」
巻五の二「正成兵庫へ参る事付還幸の事」	巻十一「正成参兵庫事付還幸事」
巻五の三「公家一とう政道の事」	巻十二「公家一統政道事」
巻五の四「中前代ほうきの事」	巻十三「中前代蜂起事」
巻六の一「兵部卿親王流刑の事付驪姫が事」	巻十二「兵部卿親王流刑事付驪姫事」
巻六の二「兵部卿の宮ほうきよの事付干将ばくやが事」	巻十三「兵部卿宮薨死御事付干将鎮鉦事」
巻七の一「足利殿東国下向の事付ときゆき滅亡の事」	巻十三「足利殿東国下向事付時行滅亡事」
巻七の二「新田足利確執の事」	巻十四「新田足利確執奏状事」
巻七の三「節度使下向の事」	巻十四「節度使下向事」
巻七の四「諸国の朝敵ほうきの事」	巻十四「諸国朝敵蜂起事」

なっているのだ。操扨の正体は未だに不明であるが、右のごとき不徹底さを内包する『楠一生記』という著作に彼の素顔が垣間見えていないだろうか。すなわち、時代浄瑠璃やそれに拠った時代物浮世草子に飽きたらぬ思いを抱きながらも、独自の史観を打ち出せるほどの学識を持たない、謂わば括弧付きの知識人だったのではないかということである。

六

『国書総目録』（著者別索引）は操扨の著作として、前掲の二作の他に『当世信玄記』（正徳三年（一七一三）と『近代長者鑑』（正徳四年）の二作を掲載している。月尋堂作ともされる（藤原英城）前者は「正徳三年巳ノ五月吉日 中嶋又兵衛板」で、大本五巻五冊。すなわち、『和漢乗合船』の四ヶ月後に上梓したものであるが、版元の中嶋又兵衛については後述するとして、当面は冒頭部分に注目しよう。すなわち、諸国行脚をする自然居士は富士の裾柴山が原で鬼王の霊に遭遇するが、彼は曾我五郎が「黄金の獅子の片目貫をひだりの手ににぎつて」武田晴信として転生すると告げる。また、団三郎も晴信を補佐する飯富民右衛門として転生するが、度々五郎を叩いた罪で短命。ちなみに、十郎は好色ゆえに転生できず、一緒に遊廓に通った自分も修羅道に堕ちたと明かし、曾我の重宝獅子の片目貫を晴信に渡してくれと依頼して消える。

転生の告知と、それを担保する片目貫。忘れてならないのは、

本作が『楠一代記』同様に一代記形式を採る一方で、「二世の夫婦」と同じ予言構造を用いているということである。ただ内容には以下のごとく武田家の世継ぎ争いを飯富の幽霊を絡ませながら描くもので、歴史小説とはほど遠い内実となっている。すなわち、武田信虎には妾腹の長子・晴信の他に、御台の子・次郎丸がいる。御台は女中頭の御（見崎）に執心する部屋方の侍・長坂友勘を唆し、晴信に酒淫を勧めさせ、乱暴狼藉を働かせる。そのため晴信は信州海野の城攻めで軍功をあげながらも信虎に疎んじられるが、近習の飯富民右衛門や新参の山本勘介らが御台の野望を挫き、次郎丸は出家、武田家を継いだ晴信は自戒のために法体し「徳栄軒信玄」と名乗るという結末。

また、晴信が通う三嶋の遊女・なでしこは北条氏康の家来筋の娘で、敵を狙う身。納戸役の飯富は彼女の身請金三百両を整えた上で、自害。その霊が大事な局面で晴信を助けるというのが本話の趣向で、人名など『甲陽軍鑑』巻一「信虎公追出の事」「晴信公ほつしんの事」などに負う点もあるが、文体も含め『楠一生記』とは大きな懸隔がある。

後者の刊記は以下のごとく。「正徳四年^甲菊月吉祥日／＊広告（世間比事枕全部五冊／追付出し申候御覽可被下候）京都一條通／書林 茨木屋久兵衛^持。ただ、序には「孔丘諸道を守られしも予が嗜慾^{ぎよく}にはしかず。故に周公の夢^{ゆめ}なきを愁^{うれ}ふ貧家一滴^{てき}の酒に眠りて福人四五人の盛衰^{せいざい}を枕上^{しんじょう}一炊^いの覚^{さめ}口目^{くちめ}をする」（序）筆を執て記し留し計り其人は皆誰やら知らずかし

／正徳四^甲年稔七夕の夜／落月堂操扨／＊陽刻^陽＊陰刻^陰とあるので、正徳四年七月に書き上げ、九月に上梓されたものであるうか。

「其人は皆誰やら知らずかし」(序)とあるのは、西鶴が「しる人はしるぞかし」(「好色一代男」巻一の二)「替名にして、あらはにしるしがたし」(「好色二代男」巻一の二)とモデルを醜化した手法を彷彿させ、実際「近年世間、いたりせんさくになりて、奥様は古金五両かさねて指櫛」(巻四の二)などと「世間胸算用」(「近年はいづかたも女房家ぬし奢りて」小判二両のさし櫛、今の値段の米にしては本俵三石あたりにいたゞき」巻一の二)をなぞる筆致も確認できる。

巻三は、不破の関林三郎と、その子・林四郎の話だ。すなわち、去る太守に仕える富豪の林三郎は、かつて茶の間女との間に設けた娘を青山辺の熊手の角助に三〇両付けて養女に出したが、角助は彼女を轡に売って出奔。そのため林三郎は、「能因法師とはうらはら。お江戸をばかすみとともに出しかど秋かぜぞふく白川ばしを越て」上京。「面鉢おもながに。ふたかは目。鼻筋をしとをつて大鉢難のない人相。ひたりの乳のうへに黒子ふたつ。右のみ、たぶのうらに。黒子とはまざる、やうなる。痣あつて。年のころあひは。二十ばかり」の遊女を探さよう小助らに命令する。難波、越後町東の折屋方で扇屋の吾妻路という太夫となっている娘を見つけた小助は身請けした彼女を授けられ、灰吹のたまりを飲めという要求にも応え、千両と木屋町

の下屋敷を与えられる。林三郎没後、一八歳で家督を継いだ林四郎は忽ちそれを失い、三室戸観音開帳の帰途、京橋から川へ身を投げるが、煮売屋をしていた小助に助けられ、浮世煙草入を考案する。

『太平記』(巻四「八歳官御歌事」)にも引用された、能因の歌(都をば霞とともに出しかど秋風ぞ吹く白川の関「後拾遺集・巻九」)を踏まえた行文。「年は十五より十八迄う身に瘵子ひとつもなきをのぞみ」と国上藤の条件を羅列した「好色一代女」(巻一「国主の艶妾」)のそれを反転させたとき、「痣あつて。年のころあひは。二十ばかり」という手配書^{ていし}なるほど、そうした工夫の痕跡は随処に認められるし、奥村政信風の挿絵も悪くない。ただ、西鶴に倣いながらも肌理の粗い右の文辞に典型化されるごとく拙劣で、構成も長者に成る過程よりも、成った後に遺子も含めどう散財し、どんな末路をたどったかに主眼を置いたためか、劇性の乏しい、凡庸な仕上がりとなっている。モデル小説としての可能性は残しながらも、一つだけ明らかなのは、操扨が町人物浮世草子にすこぶる不向きということだ。他の四話の内容も記しておこう。

(巻二)京都・松原の新天地の下屋敷で、深川屋庄吉は小しゆんと「お大名がたの婚礼」以上の贅を尽くした式をあげるが、彼女は馴染屋の与惣の元恋人。その折の騒動を代官所が咎め、庄吉は追放、小しゆんは嵯峨で入水自殺する。(巻二)中浦熊之助は古狐を解放した功德で江戸の屋敷方の御用をつとめて大福長

者となるが、彼に三両で狐を譲渡した徳田新内は江戸の遊女・

金山に打ち込み、狐に化かされて破産。熊之助は身請けした金山と下屋敷を新内に与える。(巻四) 都、名題の分限、長浦篠右衛門の一子中三郎は、揚げ詰めにした太夫岸部の遺言で妹女郎の小式部を身請けし、出家したいという申し出を叶える。(巻五) 新銅白次郎の子息京三郎は遺産を使い果たし、大黒舞となる。だが、白次郎の忠功を知る大名に京屋敷の支配を任せられ、彼は

与惣(巻一の二)の世界に円環する。
 『和漢乗合船』、『楠一生記』、『近代長者鑑』。また、もし仮に『当世信玄記』も操扨の作とすれば、彼はその四年間にかなり趣きの異なる四作を手がけたことになる。その振幅の大きさは、この時期の京都小説界の混乱と模索を物語つてもいいのである。

七

『当世信玄記』の版元、中嶋又兵衛は其磧・自笑の抗争期に忽然と出現し、正徳三年から享保二年までの五年間に浮世草子

出版年	江嶋屋	八文字屋	中嶋又兵衛など(ゴシック体は操扨とされる作品と書肆)
正徳三年	正月『渡世商軍談』 此年『通俗諸分床軍談』(谷村清兵衛と相版) 『女男色遊』(其磧作・谷村刊)	正月『鎌倉武家鑑』(其磧作) 同『當世御伽曾我』(其磧作) 二月『百性盛衰記』 九月『手代袖算盤』	正月『今川一睡記』 同*『和漢乗合船』(版元・京都／北尾八兵衛) 二月『百性盛衰記』 五月*『当世信玄記』 九月『西海太平記』
同四年		正月『女男伊勢風流』 三月『愛敬昔色好』	九月*『近代長者鑑』(版元・京都／茨木屋久兵衛) 同『京略ひながた』
同五年	正月『丹波太郎物語』 冬『世間子息氣質』	正月『風流誑平家』 四月『義経風流鑑』	
同六年 (六月三日に享保と改元)		正月『分里艶行脚』	三月*『楠一生記』(版元・京都／今井(菊屋)七郎兵衛・西村理右衛門・金屋平右衛門) 六月『曾我鎌倉飛脚』 九月『庭訓染匂車』

八編、絵入狂言本一編を上梓するが、浮世草子の五編が八文字屋と共通するなど不審な点が多く、未だ正体が不明な謎の書肆。ただ、操扨が登場する必然性と作風の振幅は、この混乱期と無縁ではないので、操扨が活動した正徳三年から六年に絞り、書肆の動向を確認しておこう（前掲表参照）。

『和漢乗合船』の版元、玉水屋こと、北尾八兵衛は既に『日本桃陰比事』（宝永六年三月）『一夜船』（正徳二年正月）などの浮世草子を手掛けていたが、彼は後に其碩の『鬼一法眼虎の巻』（享保一八年正月）も上梓することとなる。その折、相版元となった今井（菊屋）七郎兵衛は既述のごとく、『楠一生記』の版元でもあった。彼は八文字屋に匹敵するほどの実績を有し、西沢一風の作品をはじめ多数の浮世草子を出版している。相版元の西村理右衛門の正体は不明であるが、金屋平右衛門は『寛闊よろひ引』（正徳三年正月）を出している。『近代長者鑑』の版元、茨木屋久兵衛については、未だ分明でない。

其碩・自笑の抗争期は家宣の治世期（宝永六年～正徳二年（一七〇九～一七二二）に当たり、「下々の雑説落事も定而御構なく取上て御覧じて政道を行せ給はん」（日光郡郷枕）という緩和状況下で時事小説が書かれ、多くの書肆が浮世草子に参入したとされる。月尋堂、青木鷲水、北条団水といった作者に混じり、無名の素人作者たちが簇出するが、浮世草子の出版経験を持つ北尾八兵衛が版元となった、『和漢乗合船』の著者・操扨もその一人であった。長曾我部家の盛衰を背景とした、壮大な恋愛

劇。予言の実現と、それを担保する聖痕の存在。凡庸ながらも「期待の地平」を裏切らない、読者を満足させる結末。そうした構想を包む、巧みな文体。なるほど、一二話の総てが秀逸というわけではない。それでも、素人の作としては出色であり、以後の創作活動は彼の才筆を見込んだ京都の諸書肆の従容に依えてのものと推測できるが、結局は本作以上のものを生むことができなかった。思えば、翻案という装置が彼の力を誇大に見せていたのである。ただ、結果的にせよそれが読本を先取りしたごとき文体や構想を備えていたことは間違いない。ところで、前掲のごとく多くの共通点を有しながらも、『和漢乗合船』は浮世草子で、「浅茅が宿」（『雨月物語』）は（初期）読本とされているなぜか。

歴史小説という点で通底する、時代物浮世草子と読本。その違いを考察した中村幸彦は、後者の特質として次の諸点をあげた。長編小説、構成、文体、性格の妙、芸術的真実性、思想性。長編小説という点は両者とも該当しないし、思想性という微妙な問題も留保するなら、二作の経緯はどこにあるのだろうか。村上春樹は、こう書いている。

『雨月物語』なんかにあるように、現実と非現実がびつたりときびすを接するように存在している。そしてその境界を超えることに人はそれほどの違和感を持たない。これは日本人の一種のメンタリティーの中に元来あったことじゃないかとおもうんですよ。それをいわゆる近代小説が、

自然主義リアリズムということで、近代的自我の独立に向けてむりやり引っぱがしちゃったわけです³²と。

秋成が現実と非現実の微妙な「あはひ」に実在する人間を描こうとした時、際どいリアリティをぶち壊す輪廻転生や聖痕といった小道具はむしろ邪魔だったのではないだろうか。それに對し、小道具にこだわりの、売れる本のためにはリアリティを犠牲にすることも厭わない操縦。両者のそうした差は、そのまま読本と浮世草子の違いなのだと言いたいところであるが、秋成という傑出した「個性」をそのままジャンルの特性と決めつけるのは早計であろう。馬琴の八犬士は牡丹の聖痕を有していたからだ。それは、秋成と馬琴の違いなのか。それとも、読本というジャンルの内部変容（前期→後期）なのだろうか。

赤い痣を左の眉毛の上に持つ、ストラルドブラグ（不死人間。「ガリバー旅行記」第三部。左腕に青い痣を刻して転生した、勝九郎の妻。脇の下の「小紫」を転生の証とした、小紫。秋成へのオマージュを隠そうとはしなかった三島由紀夫であるが、「雨月物語」について）、発想はあくまでも近代人のそれであり、彼が聖痕という小道具を用いているという点では秋成の対極にあったのかも知れない。

注
1 暴論を承知で私の仮説を述べるなら、三つの黒子とは、三種の神器（天皇）を意味し、その刻印は天皇の子、すなわち日本の精神や文化の継承

を表象していたのではないだろうか。もしそうだとするなら、清顕や勲に明瞭だったそれが、戦後は外国人（タイ）のジン・ジャンの身体に刻まれ、七〇年安保世代の透のそれがまがい物であったというのは、三島の戦後世代への失望がメッセージされていたことになる。

2 テキストは、太刀川清校訂『続百物語怪談集成』（叢書江戸文庫二七・国書刊行会・一九九三年）に拠る。

3 松村美奈氏の口頭発表「和漢乗合船」の成立に関する一考察（運敵著『寂照堂谷響集』・『谷響続集』の介在について）（日本文学協会第三〇回研究発表大会・於フェリス女学院大学・二〇一〇年六月二六日）。

4 テキストは、木越治「浮世草子怪談集」（叢書江戸文庫三四・国書刊行会・一九九四年）に拠る。

5 佐伯孝弘「お春の造型——世間菱形氣——の二・一の三小考——」（森川昭編『近世文学論輯』和泉書院・一九九三年）の「注29」には、「堀川貴司氏の教示」と断った上で、李東郭（李嶺。字は重叔。東郭は号）は實在の人物で、正徳元年来聘の朝鮮通信使の製述官だったとある。

6 注に触れたもの以外では、長谷川強「浮世草子の研究」（『浮世草子考証年表』塚田晃信「今昔物語」の近世における受容の一端——井沢長秀校訂本に先立つもの——付翻刻浮世草子『和漢乗合船』（『東洋大学短期大学紀要』一四号・一九八三年）など。

7 拙稿「和漢乗合船」檜谷昭彦編「二冊で怪談（おばけ）ばなし100冊を読む」（友人社・一九九二年）。

8 神谷勝広「浮世草子における『琅邪代醉編』利用——『和漢乗合船』『好色敗毒散』」（『同志社国文学』七〇号・二〇〇九年三月）。

9 「土佐国長宗我部宮内少輔元親、四国悉く打靡け、大きに逆威を振ふと聞えしかば、秀吉公、急ぎ退治すべし」と進軍し（『土佐物語』同一四、敗れた元親は四国分與となる（同一五）。「長宗我部土佐守盛親は、長東大蔵、安国寺等と一所に三萬八千余騎、南宮山の麓に備を立て、関ヶ原の合戦に横矢を射んと待構へ」ながらも敗北したとされる。黒川真道編『土佐物語一』（国史叢書・友山社・一九一四年）。同『土佐物語二・四国軍記』

(同)。「土佐物語」は全三十巻、国史叢書は二十巻本を底本としている。「土佐物語」は宝永二年以後、享保五年以前成立とされるが、「四国軍記」は元禄一三年序、宝永七年刊。

10 武生市史編集委員会編『武生市史 資料編3』(武生市役所・一九六六年)。

11 江本裕「伽婢子2」「解説」(平凡社東洋文庫・一九八八年)の表に拠る。総計の不一致も本書のまま。

12 同右。

13 市川市史編集委員会『市川市史』(第二巻・一九七四年)。

14 ナタリー・Z・デーヴィス「帰ってきたマルタン・ゲール」16世紀フランスのにせ亭主騒動」(成瀬駒男訳・平凡社ライブラリー・一九九三年)*「マルタン・ゲールの帰還」16世紀フランス偽亭主事件」(平凡社・一九八五年)の改題。一五四八年、フランスの田舎町でマルタン・ゲール失踪。その間、偽マルタン・ゲールが出現するなどの騒動があるが、故郷の街に帰還する。

15 高田衛「江戸幻想文学誌」(平凡社・一九八七年。後に『新編 江戸幻想文学誌』ちくま学芸文庫・二〇〇〇年。初出は「幻語の構造」雨と月への私注」(『別冊現代詩手帳 上田秋成』一九七二年一〇月・思潮社)。

16 佐藤深雪「二世の縁」論「雨月から春雨へ」『日本文学』一九七九年二月号。

17 佐藤深雪「綾足と秋成と 十八世紀国学への批判」(名古屋大学出版会・一九九三年)。

18 井上泰至「『雨月物語』典拠一覽」(飯倉洋一・木越治編『秋成文学の生成』森話社・二〇〇八年)。

19 慶長八年古活字本を底本とする、後藤丹治・釜田喜三郎校注『太平記一』(『岩波古典文学大系』)に拠る。

20 当然のことながら、長谷川強『浮世草子考証年表』(青裳堂書房・一九八四年)には登載されていない。

21 井上泰至「近世刊行軍書年表稿」(『江戸文学』四一号・二〇一〇年)。

22 「八文字屋本全集」(第四巻・汲古書院・一九九三年)所収。

23 山崎麓「改訂日本小説書目年表」(ゆまに書房・一九七七年)も同。但し、長谷川強『浮世草子考証年表』は「当世信玄記」の作者を操庵としてはいない。なお『国書総目録』(著者別索引)は「落月堂主人」として「佐々木軍記」(明和九年)、「操庵子」の作として「諸国年中行事」(享保二年)を掲載する。後者はともかく、明和九年刊(井上泰至「近世刊行軍書年表稿」『江戸文学』四一号・二〇一〇年)とされる前者との関係は看過できないものがある。

24 堤邦彦「曾我五郎再生譚の近世的展開」(『近世文藝』五三三号・一九九一年)。

25 所見本は東北大学図書館狩野文庫本。

26 「好色一代女」(巻一「国主の艶妾」)のこの場面を反転させた浮世草子に其碩の『野白内証鑑』(十六「案外卦」)がある。

27 中嶋隆「日本文学協会第三〇回研究発表大会・二〇一〇年六月二六日」によれば、好色本も手掛けたという。

28 篠原進校訂「八文字屋集」(『解題』(叢書江戸文庫八・国書刊行会・一九八八年)。

29 「風流今平家」(元禄一六年正月)、『風流連三味線』(同)、『傾城武道桜』(宝永二年八月)、『伊達髪五人男』(同四年正月)、『風流三国志』(同五年正月)、『美景時絵松』(同年三月)、『好色手柄咄』(同年)、『風流御前二代曾我』(同六年正月)、『儒偶用心記』(同年六月)、『けいせい伽羅三味線』(同七年正月)、『けいせい禁談議』(同)、『草木軍談賤爪木』(正徳四年正月)。

30 倉員正江『浮世草子時事小説集』(『解題』(叢書江戸文庫三一・国書刊行会・一九九四年)。

31 中村幸彦「読本発生に関する諸問題」(『近世小説史の研究』桜楓社・一九七三年)、『中村幸彦著述集』(第四巻・中央公論社・一九八七年)所収。

32 村上春樹「夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです」(文藝春秋・二〇一〇年)。

(しのはら・すすむ／本学教授)